

紀要

土偶装飾付土器の根本的性質と展開過程.....	瀬口 眞司 (1)
栗太郡の白鳳寺院研究史	宮村 誠二 (19)
蜂屋遺跡出土軒瓦を考える	福井 知樹 (24)
天武朝期における野洲地域出土須恵器の法量分化について —西河原森ノ内遺跡北半包含層を中心として—	遠藤あゆむ (28)
中世成立期の民衆の思想と信仰 —塩津起請文と卒塔婆から—	濱 修 (37)
中世集落における巻数板のあり方について —考古資料の検討から—	木下 義信 (46)
将棋史研究ノート10-2 —日本における博打と将棋の関わり その2—	三宅 弘 (53)
滋賀県行政文書で見る「近江の考古学黎明期」	田井中洋介 (63)
未就学児と歴史系ワークショップについての予察 ...	鈴木 康二 (76)

33

未就学児と歴史系ワークショップについての予察

鈴木 康二

はじめに

本稿では、いわゆる「未就学児」について、様々な分野からの見解・分析結果やそこから考えられる可能性について整理したい。具体的には、①なぜ「満6歳」なのか、②「6歳未満」の乳幼児を対象とする歴史系ワークショップの実施の可能性とその課題、という2点についてまずは探るべく、未就学児に対する理解の現状を整理する。

1. そもそも「未就学児」とは

一般に「未就学児」という場合、小学校入学前までの乳幼児を指す。昭和22年3月に公布された「学校教育法」の、第二十二条には次のように記されている。

「第二十二条 保護者(子女に対して親権を行う者、親権を行う者のないときは、後見人又は後見人の職務を行う者をいう。以下同じ。)は、子女の満六才に達した日の翌日以後における最初の学年の初から、満十二才に達した日の属する学年の終りまで、これを小学校又は盲学校、聾学校若しくは養護学校に就学させる義務を負う」(1)

つまり、「保護者」には、その子どもが満6歳以上(数え年で7歳ないし8歳)になると、小学校等へ「就学させる」ことが義務付けられている。従って、法的に「未就学児」に該当するのは、現在の日本国においては、満6歳未満の乳幼児ということになる。

なお、現行の学校教育法には、

「第八十条 幼稚園に入園することのできる者は、満三才から、小学校就学の始期に達するまでの幼児とする。」(2)との記述があり、満6歳未満の乳幼児のうち、満3歳以上の子どもは幼稚園に「入園可能」、と規定されている。ちなみに、近年の欧州での傾向としては、義務教育開始期を低年齢化することの必要性が指摘されており、例えば最も早いものとして、3歳以上の幼児を義務教育の対象とするフランスの例(2019年度から施行)が挙げられる。このことから、今後日本の学校教育法あるいは義務教育のあり方が見直される可能性も示唆されよう。

しかしながら、少なくとも現在の日本国においては、上述した状況であり、本稿では「6歳未満の乳幼児」を「未就学児」として、以降の記述を進めることとする。

2. なぜ「満6歳」なのか

さて、ではなぜ「満6歳」なのだろうか。近代教育制度をさらに遡り、明治5年8月公布(太政官布告)の「学制」をみると、「小学」の項に以下のような記述が確認できる。

「第二十二章 幼稚小学ハ甲女ノ子弟六歳迄ノモノ小学ニ入ル前ノ端緒ヲ教ルナリ」

「第二十七章 尋常小学ヲ分テ上下二等トス～中略～下等小学ハ六歳ヨリ九歳マテ～後略」(3)

つまり、この時点で既に「6歳」というのは、一つの定点として示されているようだ。ちなみに、この学制は、「江戸時代からの諸学校の普及を基礎とし、さらに欧米諸国の教育制度を参照してわが国の学校教育制度を創始」(4)すべく起草・公布された制度であり、その内容等細部については、江戸時代以前の慣例や法・令に依る可能性が高い。

では江戸時代以前にはどのような様態が確認できるのであろうか。いつから「6歳」が節目だったのであろうか。あるいは当時の「6歳」(満6歳もしくは数え年で7～8歳)の子どもに対する「イメージ」とは如何様だったのであろうか。これらの点については、残念ながら現時点では整理しきれていない。ただ、柴田純によれば、「養老律令」には、「九十以上、七歳以下、死罪有ると雖も、刑を加えず」(「名例律」三十条：『律令』日本思想体系3、岩波書店)という記述があるそうで、「九十以上、七歳以下」を絶対無責任能力者である、とする考え方は、中国の唐名例律に明文化され、日本でもそのまま踏襲されたということが指摘されている、という(柴田2013)。「6歳」ではなく「7歳」であるという点を除けば、少なくともこの時点で既に節目としての境界年齢が示されていたといえよう。

さてさて、しかし結局は、現時点では「なぜ・いつから「6歳」(あるいは「7歳」?)だったのか?」という点については、現状での文献資料や歴史的経過の中からは、結論が導き出せてはいない。もちろん、さらに遡ればどこかに定点の発端がある可能性は否定できないであろうし、例えば考古資料を素材としてこの「6歳」を検討できる可能性も、かなり低いとはいえ皆無ではない。今後の課題の一つとして、受け止めておきたい。

3. 文化人類学における研究成果

実は、「6歳(・7歳)」がキーワードになる事例は、文化人類学の調査・研究成果にもある。金子守恵によれば、エチオピアのアリという土器作り村に生まれた娘は、土器を作る母親のそばで、粘土遊びをしながら土器の作り方を身につけていくという(金子2011)。その「本格的に土器作りを始める」年齢が、「6～7歳」ぐらいだと言うのだ。

このアリ村では、マナと呼ばれる職能集団の女性たちが

専門的に土器を作っていて、家事労働以外のほとんどの時間を土器作りに費やすことが確認されている。産後すぐに、授乳しながら土器を作る様子も確認されている（写真1）ことから分るように、そこに生まれた「娘」は生まれて間もない乳児期から、幼少期を通じて、土器を作る母親のそばで過ごし、そしてやがては粘土遊びをしながら、土器の作り方を、そして土器を作るということを、徐々にそして確実に身につけていく（写真2）。

やがて彼女たちは、「6～7歳」頃から、母親の傍らで自分専用の道具を使いつつ、本格的に土器作りを始める（写真3）という。まず母親が作る土器と同じ形の小さな土器から作り始め（「模倣」）、やがて大きく繊細な技術を要するものを作れるようになる頃に、一人前（の職人）として認められ、やがて「嫁」に行くそう。なお、6～7歳の時点でも、自分の作った土器は、自分の責任下で売買を行っており、そこには既に「6～7歳児の社会的役割」が存在しているという。つまり「6～7歳」は既に、「一人前」（≒大人）として扱われているということになる。

4. 他分野の「満6歳・未就学児」についての所見

こうして見てくると、前述の2.では「なぜ満6歳なのか？」は結局わからないままだったが、文化人類学でも類例があるし「やはり6歳という年齢は、そもそも節目として成立し得るのでは？」という気もしてくる。あるいは、例えば「生物学」的には、「6（・7）歳」という段階に、実は何某かの定点があり得るのではないかと。

しかしである。実は、ここまで「満6歳」という年齢にこだわって、なぜそうなったのかを知るべく歴史を遡行し、あるいは空間を広げて観察したのは訳がある。子どもの発達・発育を観ると、近年の研究の現状からは必ずしも「満6歳」が明瞭な節目とは限らないからである。ここでは、改めて「未就学児」について、もう少しほかの分野、すなわち発達心理学あるいは幼児教育における考え方を少し整理してみる。

幼児の発達・発育あるいは学習・教育といった側面から、どのような位置づけ・評価がなされているのか。例えば、未就学児についての発達心理学や美術教育の関連分野で観察された、興味深い事例・指摘がある。それは、中川織江による、幼児の粘土造形に関する研究・観察事例で、粘土という素材に対する幼児の働きかけを主な対象としている点で非常に興味深い。その研究の詳細についてはここでは記述しないが、技術・発達段階としての所見からは、遅くとも「5歳児」の段階で「器」状のものを作る（写真4～6）能力は十分あると指摘している（中川2001・2005）。

美術教育においては、描画や作品としての絵画が研究対象となることが比較的一般とされている。その中で、一般に「絵画資料」の観察・分析から発達・発育レベルを判断する一つの材料として、「空間」についての把握・表現

の可否という観点がある。つまり2次元的な平面的な把握・表現方法から、3次元的な立体・空間把握・表現方法への変化を読み取るのである。実際に、子どもたちの描いた絵を観察してみると、概ね3歳ないし4歳以降になると、表現方法が大きく変わることが読み取れた(5)。その上で、上述した中川の観察結果を読み解くとすれば、5歳児の段階に至って、「器」という「その中に空間を持つ立体物」を造形する発達段階にある、と解釈することもできよう。

ちなみに、発達心理学においては、井尻正二は「生まれてから4歳ぐらいまでは脳の大きさや身体機能は急激に成長・発達するが、4歳を過ぎるとおおよそ20歳ぐらいまでは緩やかな発達・維持曲線を描くようになる」と指摘している（井尻1980）。あるいは大澤清二・下田敦子らによれば、タイのムラブリ人の身長発育速度においても、同様の傾向が確認されており、4歳までは急速に発育し、4歳を過ぎると成長速度が緩やかになることが指摘されている（大澤・下田ほか2018）。

このように、脳容積や身長、さらには手指の物理・技術的な部分での幼児の発達段階が、3・4歳あるいは5歳ぐらいの時点で、概ね次のステージに移行し得ることを示唆していよう。つまり発達心理学的には必ずしも「6歳」ではなく、もう少し早い時点、つまり「3～4・5歳」を、もちろん個人差はあるが、ある一定の節目足り得る年齢を含む段階、と捉えることもできるかも知れないのだ(6)。

5. 「5歳児」を観察する

本来ならここで、「3～5歳児」の観察事例を個別具体的に取り上げて、検討を深めたいところだが、残念ながら現時点で提示し得る観察所見はほとんど無い。唯一、「5歳児」について若干の観察所見を得ているのみである。従ってここでは、先述した中川の研究成果によって「5歳児」と粘土造形「器」との関係が看取でき得ることを踏まえながら、実験的な試みとして、岐阜県飛騨市にある宮城保育園での年長組幼児を対象として実践された「縄文土器作り」を紹介したい。なお、この取組は、同園からの依頼に基づき飛騨市教育委員会の文化財担当部局が実践している(7)。

まず基本的な流れとしては、縄文文化について担当者お手製の紙芝居を使って大まかに説明した後、飛騨市域で出土した本物の縄文土器（全体の形がある程度分かる個体を準備）を実際に子どもたちに触ってもらいながら、縄文土器の作り方を順次粘土を使って説明しつつ、子どもたちが自分たちの手で作り上げていく、というものである。なお実物の縄文土器に触れる際には、「粘土紐の継ぎ目」や「指の痕」を具体的に意識させた。また実物の粘土紐の太さを参考に、子どもたち自身が粘土塊から粘土を千切りその量を調節しつつ粘土紐を作り、それを順次積み上げながら土器の形を作っている（写真7・8）。そして最後に、事前に用意した「縄文」原体や貝殻を使って、自分の土器に模



写真 1



写真 1 : 乳児を抱いて土器作り
写真 2 : 土器作りに関する身体的コミュニケーション
写真 3 : 母親と同じ形で小さなものを成形する子ども
(いずれも金子 2011 より転載)

写真 2



写真 3



写真 4



写真 5

写真 4～6 5歳児が作った「器」
(いずれも中川 2005 より転載)



写真 6

【5歳児】写真 7・8 縄文土器作りの様子
(いずれも飛騨市教育委員会提供)



写真 7



写真 8

様を付けて完成である。なお、この時は「乾燥によって固まる」粘土を使用し、焼成工程は実践しなかったため、土器作りとしてはここで終了となる。全体としては、子ども4～5人のグループに、大人最低2人が補助として就き、子どもたちの「助けて」を合図に子どもたちと相談しながら手伝うという、あくまで「作るのは子どもたち」、という配慮のもとに進められている。

実際にこの縄文土器作りに立ち会った感想としては、「5歳児」にとって、まず基本的に「土器作り」そのものは十分に可能な作業、ということである。その上で、果たして縄文土器＜縄文文化＜縄文時代というモノあるいは概念については、どこまで理解ができたのであろうか。従来からしばしば指摘されるように、一般的には5歳児の時点では「時間」という概念を理解できないとされる。確かに、「縄文時代は“今から1万年前の”、」と担当者が説明・伝えても、子どもたちの顔からは理解には至っていないようなそんな表情も読み取れた。しかしながら、「縄文文化」、中でもより具体的な「生活の様子」やあるいは「縄文土器」の説明になると、子どもたちの表情がそれまでとは少し変わり、当時の生活風景を描いた紙芝居には明確に反応していたし、縄文土器についても、「表面に縄の模様のついたお鍋」のようなものだというこちらの説明を聞き、子どもたちの口から「何を食べたの?」「何を（どんな料理を）作ったの?」という質問が出ていたことから、縄文土器や当時の「生活の様子」については、少なからず理解できたのではなかろうか。

この状況から導き出せる見解としては、5歳児への「縄文土器作り」ワークショップの提供は、「歴史」としての「縄文時代」という概念を理解できるところまでは踏み込

めなさそうであり、あるいは「文化」という抽象概念も理解は難しいものの、より具体的な「生活の様子」やあるいは「縄文土器」という「当時の道具」については、一定の理解を期すことは可能であるように見受けられた。

6. 「モノそのもの」に対する興味

幼児が、「モノそのもの」に対して興味・関心を示した事例としては、筆者が以前拙稿で紹介した「2歳児」についての観察所見（鈴木2019）があるが、その後別の「3歳児」についても一部類似した事例を観察したことがある。

それは上記拙稿で紹介したワークショップを、別の施設で実施した際の出来事であるが、真弧を使ったワークショップ（写真9：「手作りマコ」を作る）が終了した後、ワークショップの素材の一つとして用意していた「表採資料の土器片や石器」あるいは「真弧」に対して興味を示し、土器片を触ってみたい、真弧を鼻や額に当てて遊んでみたい、それらのモノに少なからず興味を示したのである。ただ、2歳児のように「ただ黙々とひたすら触り続ける」というよりは、ある程度、その「モノそのもの」もしくは「触るという行為」を「体感（≒観察?）」し、当人なりの「理解」が進んだ、もしくは「納得」した時点で、興味はほかの対象（≒次のステージ）に移行しているように観えた。すなわち展示ケース内にある石器を順番に眺めたり（写真10）、土器を凝視したり（写真11）、というようにである。ちなみに、3歳児については、モノ作りを絡めた、ほかの歴史系ワークショップにおいても、「切る」「貼る」「塗る」「描（書）く」等の行為に一瞬没頭する様子がしばしば確認でき、やがて「理解・納得」を経て次の行為・モノへと関心が移る様子が看取されている。



写真9

【3歳児】

写真9：ワークショップでの「手作りマコ」作成に集中する様子

写真10：ワークショップ終了後の様子1
展示ケース内の「石器」を巡覧する様子

写真11：ワークショップ終了後の様子2
展示ケース内の「土器」を凝視する様子
(いずれもNPO法人ちやいれじ提供)



写真10



写真11

おわりに

さて、ここまで未就学児に関する情報を、発達心理学、美術教育、文化人類学などを参照しながら、整理してきた。現時点で、あえて結論めいた事を述べるとすれば、「満6歳」を定点とすることについては結論は出ていないが、5歳児を対象にすれば、「実物」を使いつつ、具体的な「実生活に引き寄せて考えやすい出来事」を素材にすれば、例えば前述した「縄文土器作り」のような、歴史系ワークショップであれば充分開催できそうだとことであろうか。またもう少し若い、3歳児（あるいは2歳児）でも、「モノそのもの」あるいは「単純な行為」をワークショップの主素材にすれば、充分興味を引き付けられそうである。

ただ、気をつけなければならないのは、もちろんこれまで見てきた「年齢」については、あくまで概念的に大枠として捉えたものであり、当然個人差もあるし、この段階では「月齢」どころか「その日その瞬間」に、「何を観て、何を体験したか、何を感じたか・・・」次第で、幼児の感じ方や興味関心の向かう先は、変わり得る。そのことを肝に銘じながら、子どもたちと向き合う必要があることは言うまでもない。従って、これは拙稿（鈴木 2019）でも述べたが、ファシリテーター1人に対して多数の未就学児を相手にする形式のワークショップでは、子どもの様子を十分に観察しつつ各個人の進捗に併せて進めることが難しく、学習効果の高い取り組みにはなり得ない可能性が著しく高い。「ファシリテーター1人に対して未就学児2人まで」という条件を付さない限り学習効果はほとんど期待できない。つまり、未就学児に対しては、ワークショップの「内容」を十分に吟味する必要はもちろんあるが、くわえてその「手法」についても同様にしっかりと検討していく必要がある。

【謝辞】

飛騨市立宮城保育園での縄文土器作りにおいては、同園の園長先生をはじめ保育士の方々および飛騨市教育委員会の三好清超さんには種々のご教示を頂いた。またワークショップの実践においてはNPO法人ちやいれじに依る部分が多い。この場を借りて謝意を表したい。

註

- (1) 学校教育法の原文は以下のホームページの記載による。
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317990.htm (2020年1月現在)
- (2) (1)に同じ
- (3) 学制の原文は以下のホームページの記載による。
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317943.htm (2020年1月現在)
- (4) 『学制百年史／二 近代教育制度の創始』より抜き書き。原文は以下のホームページの記載による。

https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317567.htm (2020年1月現在)

- (5) 実際にとある保育園で、0～5・6歳児までの絵画資料を観察する機会を得た。その結果少なくとも「3歳ないし4歳以上」においては明らかに空間把握・表現についての変化が見られることを確認した。しかし残念ながら、諸事情により記録化は叶わなかったもので、この点については後日改めて整理したい。
- (6) なお、発達心理学においては、J・ピアジェの認知発達研究の成果が、広く一般に知られている。その認知発達段階によれば、認知発達の画期として、概ね「(1歳半～)2歳前後」・「7歳前後」・「12歳前後」が想定されている。つまり前述してきた「3～5歳」あるいは「6～7歳」という年齢は、実はピアジェの指摘する発達段階の「前操作期：概ね2～7歳前後」に相当する。実はこの「前操作期」という表現自体が極めて示唆的なのだが、2歳までの「感覚運動知能期」から、7歳以降の「具体的操作期」に至る移行期をとらえた段階であり、幼児におけるどの変化・何の変化に注目するかで、より具体的な細分・段階設定ができ得る発達段階とも言えよう。なお、ピアジェの認知発達理論については、特に「感覚運動知能期～前操作期」を中心に改めて別稿で検討を加えたいと思っている。
- (7) 筆者の知る限り、これまでに3回実践しており、その内の2回、2018年7月、2019年5月の実践に際して、筆者も関わった。なお、写真は2019年5月の実践時のもので、この時は17人の幼児を対象としている。

文献（著者名・機関名 50音順、刊行年順）

- 井尻正二（1980）『こどもの発達とヒトの進化』みんなの保育大学2、築地書館
- 大澤清二・下田敦子ほか（2018）「思春期の身長発育スパートが見られないムラブリ人について」『発育発達研究』第80号、30-38
- 大浜幾久子（1997）「展望 ピアジェ理論の展開：ジャン・ピアジェ生誕百年にあたって」『The Annual Report of Educational Psychology in Japan』vol.36、144-155
- 金子守恵（2011）『土器づくりの民族誌—エチオピア女性職人の地縁技術—』昭和堂
- 柴田純（2013）『日本幼児史—子どもへのまなざし』吉川弘文館
- J.ピアジェ著谷村覚・浜田寿美男訳（1978）『知能の誕生』ミネルヴァ書房
- J.ピアジェ著大伴茂訳（1988）『模倣の心理学』幼児心理学1、黎明書房
- 鈴木康二（2019）「考古学／考古資料のさらなる活用と生涯学習—ホンモノに「さわる」—」『考古学研究』第65巻第4号、1-5
- 中川織江（2001）『粘土造形の心理学的・行動学的研究—ヒト幼児およびチンパンジーの粘土遊び』風間書房
- 中川織江（2005）『粘土遊びの心理学—ヒトがつくる、チンパンジーがこねる』風間書房
- （すずき こうじ：調査課 副主幹）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.33 2020.3

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages